

土光氏の言葉に触れ、いまを考える

— 愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ

『IHI 技報』の前身の『石川島技報』が創刊されたのは1938（昭和13）年。その後1961年に『播磨造船技報』が統合されて『石川島播磨技報』となり、2007年に『IHI 技報』に改称された。技報にはこれまでの技術の変遷が凝縮されているが、そこには先人たちの思いも詰まっている。企業人として社会のため、会社のために貢献するにはどうすべきなのか、戦中・戦後はなすすべもないということもあっただろう。それでも前を向いて進んでいった人たちの言葉は、いまを生きる我々にも響いてくる。

1945年8月15日に日本は終戦を迎えた。焼野原から国を建て直す。それは想像を絶する困難な道のりだったのではないかと。鉱工業指数*は、1940年が100.2であったのに対して、1945年は44.6、さらに1946年には18.0まで落ち込んでいたという。この期間に、産業の中心は繊維などの軽工業から重化学工業へと変わっていく。

日本は戦後、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の占領下に置かれ、その指導のもと、国内の民主化が進められた。そして、日本の軍国主義を支えたとして財閥は解体され、そのほかに農地改革や労働改革などが行われた。

1951年、日本はまだGHQの占領下にあり、戦後復興期といえるときだった。『石川島技報』9巻27号に書かれた「重工業と研究」という記事がある。石川島重工業株式会社の社長（当時）だった土光敏夫氏によるものだ。

敗戦による虚脱状態を漸く脱した日本重工業は、輝かしい再建への途を歩んでいる。

1950年6月に朝鮮戦争が始まり、それに伴いアメリカ軍は日本に物資やサービスを大量に発注した。いわゆる「朝鮮特需」により日本経済は戦後の不況から脱することになる。しかしながら、以下のような危機感を伝える。



これは一時的現象であつて永続性は期待できないであろう。……数年後には必ず来る本格的な世界競争時代を迎えて、品質においても、価格においても競争に十分にたえ得るだけの基礎をきずいておかなければならない。

また、戦後アメリカを視察した人々の言によれば、アメリカと日本の技術レベル、事業規模の格差は大きく、戦争による日本の重工業の空白時代の影響は極めて大きいと土光氏は悔しさをにじませつつも前進を促す。

これは今さらいかんともなし難いことであるが、要は今後我々が如何に現在の状態から、この損失を取り戻し、彼我の差を縮めるかということであつて、その方法については世上種々論ぜられているところである。

政府は輸出を増やして外貨を稼ぐよう産業界に働きかけた。資源のない日本では、外貨を稼ぐ輸出産業が必要だった。

日本の重工業は材料をはじめ各部門において極めて悪条件のもとにあるが、これに打ち克つて将来の発展を実現し、大量の輸出を確保して、経済の自立を計ることはわれわれの使命である。

戦後、繊維産業は綿紡績設備の再建を進め、アメリカからの輸入綿を確保したことで、いち早く復興を遂げて外貨獲得に大きく貢献した。これについては、他産業にも目を向ける必要性を述べている。

我国繊維工業の発展過程をみると、原料市場ともに不利な条件のもとで種々研究を行い、戦前にはあのような素晴らしい成果をあげたし、また戦後においては今日の如き見事な復興をなしとげている。我々は経済上、技術上大いにこれを参考とすべきである。

重工業においても研究を進めることが急務で、最も重要であると言及し、さらには基礎研究に主眼を置く大学などの研究機関と応用研究を主体とする企業の研究機関との関係改善と産学連携の必要性を論じている。また、アメリカよりも条件の相似するヨーロッパ諸国の例を調査した方がいいと言及する。

現在日本のおかれている状態よりみて重工業の确实にして、急速な進歩発展がいかに緊急であるかを真剣に考えるならば、そこに我々関係者の熱情が燃え上がるべきである。

この記事から、広い視野を持って物事を見て、現状をしっかりと分析して足元を固めながら着実に歩んでいく土光氏の姿勢を読み取ることができる。

いまは先の見えない時代とよく言われるが、戦後を脱し、高度経済成長期を経て、バブルの崩壊、阪神淡路大震災、リーマンショック、東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故、そしていま新型コロナウイルス感染拡大と、世の中はいっそう複雑さを増しているようにもみえる。

だが、結局それら一つひとつに向き合って乗り越えなければならぬ。より困難な時代を乗り越えてきた先人たちの言葉は、いまを生きる我々のヒントとなり後押しをしてくれるだろう。

今我々は現在までの結果の大小、巧拙を論ずべきではなく、かかる認識と熱意こそが今後日本重工業の将来を左右する最も大きな要素であることを確信し、現在許された条件の最大限において、自らの基礎を一步一步築いていくべきであると考え。



引用部分は以下の記事から抜粋し、一部修正を加えています。

『石川島技報』9巻27号 1951年6月
「重工業と研究」土光敏夫（取締役社長）

（文責：IHI 技報編集事務局）

（注）*：鉱工業指数とは、日本全体の鉱工業製品を生産する事業所における、生産・出荷・在庫に関連する諸活動を指数化した統計。

このほかにも、前ページの記事と同時代に刊行された技報には技術開発、研究の必要性を述べている記事が多くみられる。土光氏以外にも各専門家がそれぞれの立場から語った貴重な意見が記されているので、以下に紹介する。



重化学工業の発展と輸出の増進，これが新生日本の指標と考える。

「当社の技術」 収野正士（取締役）
『石川島技報』10巻30号 1953年4月

古い伝統の殻に立籠って惰眠を貪っていることはもはや許されない。何うしても新技術の開発に向って大巾に跳躍せねばならない。

「新技術の開発」 海老原敬吉（東京工業大学精密工学研究所長）
『石川島技報』15巻48号 1958年1月



技術革新の時代において各企業は新技術の開発によるみづからの発展ならびに生産技術の向上による合理化に極力努めなければたちまち落伍者となるであろう。

「技術革新の時代に処して」 杉本正雄（工業技術院機械試験所長）
『石川島技報』15巻49号 1958年4月

新しい技術を完成させるためにはどうしても各分野の専門家間の協力が必要になって来る。…… 専門家のチームワークが是非共円滑に運営されねばならない。

「研究の管理」 石村幸四郎（工業技術院東京工業試験所長）
『石川島技報』15巻51号 1958年10月



基礎を着々と固めて行くことをしなければ将来の技術の進歩は期待できない。

「研究の重要性」 茅 誠司（東京大学総長）
『石川島技報』16巻52号 1959年1月

研究と実際の技術との間のつながりの役目を果たすものがデベロップメント，即ち開発なのである。

「研究と開発」 青山秀三郎（防衛庁技術研究本部長）
『石川島技報』16巻53号 1959年4月





科学技術を振興し、所謂工業立国の旗印の下に日本人の生活水準の向上をはからねばならない……この為には我国に於ける研究態勢の強化が最も必要なのである。

「民間研究のあり方」 木原 博（日本溶接協会会長 東京大学教授）
『石川島技報』16 巻 55 号 1959 年 10 月

「石川島播磨技報」に課せられた使命はけっして小さくない。……会社の技術水準の引き上げに貢献するだけでなく、わが国の重機械工業界の技術の発展にも寄与するという使命をになっている。

「石川島播磨重工の発足によせて」 石坂泰三（経済団体連合会会長）
『石川島播磨技報』1 巻 1 号 1961 年 4 月

これからの新技術、新製品開発は、……さらに異種の技術をもちあわせた人々が集まり、研究や技術開発を総合的に完成させる必要性がますます高くなってきております。

「新会社を発足して」 土光敏夫（取締役社長）
『石川島播磨技報』1 巻 1 号 1961 年 4 月



★以下のサイトで『石川島技報』、『石川島播磨技報』をご覧になることができます。

「国立国会図書館デジタルコレクション」へのリンクが記されているページが開きます。それぞれのリンクから発行当時の技報を閲覧できます。



★IHI の技術の詳細は、以下のサイトをご参照ください。

IHI 技報を通じて IHI グループ
のイノベーションを知る



IHI 製品を支える技術



【ご案内】

IHI 技報をご覧頂きありがとうございます。
是非、関連する他の記事・論文もご一読ください。

IHI 技報 WEB サイト

[IHI 技報（日本語）](#)

[IHI ENGINEERING REVIEW
（英語）](#)

Vol. 61 No. 3 特集 産業インフラの新しい価値の創出を目指して



◆特集 産業インフラの新しい価値の創出を目指して

デザイン思考と本当のユーザーを意識した技術開発
お客さまへの価値をデジタルで創造
IHI エアロスペース 衛星打上げビジネスへ参入！
EV 船へ向けた Z ペラ® 電気推進システムの開発
再生部品を利用した車両用ターボのリマニュファクチャリング
振動のモニタリングサービス
深層強化学習とベイズ最適化による渋滞制御を行う搬送制御システム

◆箸休め

土光氏の言葉に触れ、いまを考える

◆記事

進化する固体ロケットブースタ
バイオマス発電所の営業運転開始から安定運転へ

[Vol. 61 No. 3（2021年12月）](#)

インタビュー・特集外の記事も閲覧できます。

WEB サイトでは、社会と向き合い、社会とともに進化する IHI の技術・製品・サービスもご紹介しております。関連する技報も掲載しておりますので、ぜひご覧ください。

[IHI 技報を通じて IHI グループの
イノベーションを知る](#)

[IHI 製品を支える技術](#)